

第19回みちのくウイルス塾講演予告…聴講のツボ

1. 京都大学 ウイルス・再生医科学研究所特定助教 古瀬 祐気 先生

「エボラが大流行！そのとき何ができるのか、何をすべきなのか？」2014年、西アフリカでエボラウイルス病という病気が大流行しました。道端に遺体ころがり、医者がつぎつぎと国外へ逃げ出し、ほとんどのお店も閉まる中、わたしはWHOコンサルタントとして“そこ”にいました。そのときに一体何ができるのか・そして何をすべきなのかを、みなさんと一緒に考えていきたいと思えます。

2. 北海道大学人獣共通感染症リサーチセンター国際疫学部門助教 梶原 将大 先生

「アフリカでのウイルスハンティング —出血熱ウイルスから未知のウイルスまで—」アフリカ南部に位置するザンビア共和国。周辺国ではエボラ出血熱を始めとするウイルス性出血熱が頻発する一方、ザンビアにおけるウイルス研究はほとんど実施されていません。現地駐在の約5年の間に実施したウイルス探索のデータを中心に紹介いたします。

3. アステラス製薬（株）研究本部 Principal Investigator,

岐阜大学医学系ファージバイオロジクス研究講座 特任准教授 安藤 弘樹 先生

「The age of phage ~歴史的背景から人工ファージの創出まで~」細菌の天敵ウイルス「バクテリオファージ」はどのように発見され、研究され、応用されてきたのでしょうか。歴史的背景から分子生物学における役割、薬剤耐性細菌感染症治療への応用、合成生物学的手法による人工ファージの創出など、基礎から最新の応用研究までをご紹介します。

4. 東北大学 農学研究科 植物病理学分野教授 高橋 英樹 先生 「植物ウイルスからみた宿主-ウイルスの相互作用~ウイルスと植物の共存と攻防~」自然生態系に生息する野生植物の中には、明確な病徴を示さないままウイルスに感染しているものが多く存在します。しかし、農業生態系では病原性ウイルスの感染による病害が発生し、食料生産に甚大な被害を与えています。人類は野生植物の抵抗性遺伝子を栽培品種に導入し、ウイルス病を克服してきましたが、ウイルスはその抵抗性品種に感染できるように変異してきました。演者らが主に研究してきたキュウリモザイクウイルス(CMV)と宿主植物の共存と攻防について紹介します。

5. 川崎医科大学 小児科学講座教授 中野貴司 先生 「ウイルス病制御への道~ポリオ」一部地域に残る野生株ウイルスと弱毒生ワクチン株の病原性復帰によるcVDPVの世界的増加は、ポリオ根絶の障壁になっています。また、COVID-19と同様に不顕性感染が多いポリオでは、サーベイランスが困難です。アジアやアフリカでの実体験を紹介し、ポリオ対策を考察してみたいと思えます。

6. 筑波大学生命環境系系状菌相互応答講座助教 浦山 俊一 先生 「環境ウイルス生態学—自然界の生物に潜むウイルスのはなし—」ありとあらゆる真核生物の中からRNAウイルスが見出されるようになり、ウイルスの役割に関する新たな理解の形成が必要になってきています。本講演ではこのようなRNAウイルスが見つかってきた経緯や、その機能に関する知見を紹介します。

恒例の初日終了後のフリーディスカッションと意見交換会は、時節柄今回は自粛させていただきます。

飛び入り参加も可能ですが、可能であれば**事前登録**をお願いします。これは場合によっては直前に開催が**キャンセル**される可能性もあり、その際迅速に連絡できるようにするためです。ご協力をお願いします。

連絡先：仙台医療センター・ウイルスセンター Tel& FAX: 022-293-1173 113-vrs.center@mail.hosp.go.jp